

可愛らしい光姫たち

よ し を

光姫の女王の御殿は小さな丘に建つて居る。その御家には多くの水晶の窓があり、其大きな圓い屋根は高くに聳えて居る。花子達が其御家の御門の内へ入つて見るに女王エルマは非常に愛らしい六人の侍女にかしづれて居た。其六人の人々は非常に愛らしいので誰と云つて例へやうのない位でした。花子は美しさに見とれました。此の六人の女の人は手々に竿を持つて居る。其竿の先には何の光か分るやうに徽章をつけて居た。其着物にも光の模様がついて居た。私共が其立派な御家へ行つた時、女王エルマは其侍女達に花子達を紹介して呉れた。此の六人の人達は大喜んで私達に丁寧に、氣持よく挨拶した。

其中で一番初めの綺麗で、美しく、奥ゆかしい人は日光と云ふ名の人で、其次は月光と云ふ人でした。此の月光り

ミ云ふ人は黒漆の毛をした、柔らかい、一寸夢の様な淡い目をして居る可愛のお嬢さんでした。其次は星光さんミ云ふ人で、月光さんと同じやうに愛らしい人でしたが、一寸引込み勝で、憶病でした。此の三人は銀色の白いキラキラ光る上衣を着て居ました。四番目は畫光さんと云ふので、ここにこした目や、活潑な様子をして居る人で、種々の色のついた光つて居る着物を着て居る。其次には火光さんと云ふので、キツトした美しい姿のまほりをゆれて居る様に見える炎の様な色をした着物を着て居た。第六番目の腰元の電光さん、(エレクトラさんとも云ふ)此の人は六人の中で一番綺麗な方でした。花子は初めから、日光さんに、畫光さんは此の電光さんを羨ましがつて、多少やきもちをやって見て居る様に思つた。

然も此の六人の人達は皆初めて茲に來た花子達に大變親切に案内して呉れた。姫等の女王も又大變親切に花子達をもてなして呉れた、何故かと云ふに女王は自分のいつもの居間へ花子を通して呉れて、此の六人の侍女等と一緒に色々面白い話を聞かせて呉れたからである。

此の御部屋は非常に澤山の飾があつて、體裁よく飾られ、然も此等の飾りの品には種々様々な色をして居て、目も眩むばかりでした。山を歩いてつかれ切つた花子が思ひ切つて此處へ入り、休ませて頂くこゝは花子に大變うれしく思はれた。

その中に又他の御客が來た。此の御客は女王ごなかよしだつたので、女王はさうとう其の人も、此處へ通して、今は面白さうにベチャ／＼話して居られる。此の御客さんは「今女王エルマの側に座つて居るのは晝光さんだけですな」花子に教へて呉れた。其他の侍女達はもう其御隣の室へ引込んで、可愛らしい雪の様な色した、格恰のよい手を膝に置いて座つて居て出て來て、お客に御挨拶はしなかつた。

女王は花子達や初めて見た此の綺麗な御客さんに、此の美しい王國の話をして、此の國は人間の色々必要なことを司どる、妖精フェアリーの大きな住家の一であるこゝを教へて呉れた。

此處はほんとうに大事にせねばならぬ妖精フェアリーの住家であつた。彼等は御互にけんくわをせぬため、まだ人間に一寸もつとめをせなかつたものの中から、一番えらい人を其國の支配者として選舉したのである。つまり普通の市民から支配者を選んだのである。ちやうど皆の御父さん達が市會の議員を選擧なさるやうに。此の支配者、且稱號はデンヂンミ云ふのであるが、チ、チ、チ、ホウヒヤウミ云ふ名の人でした。デンヂンと云ふのは市長と云ふのと同じこゝなのだ。此の人のおかしな事は情ハートの無いこゝなのだ。ホウヒヤウさんは、情ハートが無いかはりに、非常の理屈やで、正しいこゝを好む正義の心を持つて居た。それで此の人は何か裁判をしてうまく行つても、一寸も嘘しからなかつたけれども、又不正な罰を加へたり理なしに人をいぢめなかつた。その代り、此のチ、チ、チ、ホウヒヤウさ

んは情(ハート)のない人ですから悪いことをした人に取つては非常に恐ろしい人でした。然し悪いことを何とも思はぬやうな人々は一寸も恐はれぬ思はなかつた。

此の妖精の國の王様達や女王達は、ヂンヂンさんを大變尊敬した、何故か云ふと他の人によく云ふことを聞いてもらうのには、自分達はまづ其上の人の云ふことをよく聞かなければならぬと云ふことを知つて居たからである。

話しの國の人達は此の恐ろしいが正しいヂンヂンさんの話をよく聞かされたものだ。此の人の刑罰にも常にいくらか間違ひはあつたが正しいのでよく知られて居る人だ。生れて一度きりしか會はないけれども花子の案内者の次郎は此の人をよく知つて居る。然し此の話を聞く子供は恐ろしくこんな人について聞いたことがあるまい。花子さんも始めて此の話を聞いたのであつたが非常に面白く思つて、もう此のヂンヂンさんを恐がらなくなつた。

私共が話をして居る中に時間は進んで行つた。次郎はふと光の女王の傍に座つて居るのはもう晝光ではなくて月光であることに氣付いた。

花子は云つた。「何故あなたの上衣にはみんな龍の頭の縫が置いてあるのですか? どうぞ教へて下さい」と頼んだ。エルマの愉快さうな大きな顔は、かう云つて眞面目に變つた。

「龍はあなたも知つて居る通り、世の中に一番先きに住んで居たものです。それで龍は一番の年寄りで、生きて居たものの中では一番賢いものです。幸にも一等始めに生れた龍はまだ生きて居て、然も此の國に居て、必要な時は何時でも私達に智恵を分けて呉れます。此の龍の年は世界の年と同じで、世の中が作られてからこちらへ、起つた事件ならば何でも記憶して居るのです」

花子は云つた。「其人は子供を生みましたか?」

「さうです! 澤山生みました。其中のあるものは外の國を歩いて居ます。其龍の子の分らぬ人間は、其處で戦争したり分らぬ子供はけんくわをします。此の國にも、まだ澤山居ます、然しごの子も一等始めの龍のやうに賢くはありません。それで私達が此の一等始めの龍を尊敬するので、彼は此の國に始めて生んだ人ですから、此人に私達は

此のおまぎの國に住まふ權利を持つて居る愛すべき人間である云ふことを示すために龍頭の縫を置いた衣物を着るのです。此のおまぎの國は話の國と同じやうに美しいのですが、此方の方が力は強いのです」

「あゝ龍つてどんなものか分りました」ミ次郎は可愛い頭をうなづかせながら云つた。花子にはチットも分らなかつた。然し花子は今光姫たちが交替するのを面白く見て居た。晝光女が月光女と交替したやうに月光女と星光女と交替し、星光女は女王エルマの右側に座つた。星光女が入つて来るミ平和の精神と満足の氣が室中に満ちたやうに思はれた。次郎は妖精フェアリーなので、此の遠く距つた國に住む種々の王や女王について色々のことを尋ねた。かれこれして居る中に此の星光女は次郎と共に引退つたので、エルマが其間に答へない中に、室は蕃薇色に紅を呈し、火光女が女王の傍に座はるこころになつた。」

花子は火光女が好きであつた。然し彼の女の温い愉快さうな顔を眺めて居るに眠くなつて仕舞つた。やがて花子はコッソコッソ船を漕ぎ始めた。

可愛らしい光姫たち

かの女は「御飯時が來ました、御飯は並べられました」云つた。

子供は「やあうまいぞ、ひきく腹がすいて居るので御飯の事ばかり考へて居た。然し私はあなたのお伽噺の御飯が頂けるか知らん」云つた。

女王は微笑みながら戸口の方へミ案内した。彼の女が重い暖簾を押すに其處から銀色の光りの流が出て來り彼等を歓迎した。花子は自分の前に澤椅子のある廣間と、雪の様なリンネルがかけてあるテーブルや、其上に置いてある水晶や銀を眺めた。其一方に板の間があつて、其處には女王エルマの据はる蕃薇のやうな椅子がある。それへエルマが座はるミ一等綺麗な腰元の電光女が傍に座つた、ボールは女王の右手に花子は其左手に座つた。今は他の五人の腰元も其席に着き、何れも女王の一等好きな御馳走の前に座つた。ボールは自分の露滴の皿を見出した。それは非常に新しくキラキラして居た。花子は一生涯その半分もおいしく食べられるやうな御馳走に出會はなかつたやうな美味し御馳走にありついた。

花子が云ふには「私は皆んなの中で電光女が一番年若だ
ご思ふ」ミ女王に云つた。

エルマは笑ひながら「どうしてそんなに思はれますか」
と聞いた。

花子「何故かなら電氣が一等新しい光だご私は聞いて居
ます、電氣はエデソンが發明したんじゃないんですか？」
女王は「さうだ、多分彼が電氣を發明した最初の人であ
つたであらう」然し電氣は作られた時から世界の一部であ
つた。だから電光女は晝光女や、月光女と同じ事で、人間
にもお伽噺にも同じく大變必要なものだ」ミ云つた。

「私達は電氣なしには、うまく生きて行かれませんね！出
來ますか？」

エルマは靜かに笑つて云つた。「確かに私には出來ませ
ん。そして私は、此の私の待女のどれ一人失つたきて同じ
こと、うまく暮して行かれないであろうと思ひます。月光
は吾等に力とエネルギーを與へる日光に代はることは出來
ぬ 月光は晝光が永い間働いたので休んで居る時に價値が
ある。道を歩いて居るお月さんが地球の様に隠される時、

あの美味い月の光は私共を喜ばして呉れぬ。其時に星が代
つて天を照し、其力を貸して呉れます。火光がなければ私
共は温さを失ひ樂をなくします。其他の光もそれぞれ私共
の爲めに働きます。電光女は美しい光を送つて呉れて、色
々役に立つごきは聞いて居るでせう。光の女王ミして、此
等の待女が忠實に私の爲めに働くので、私はみんな可愛が
つてやります。

花子は

「私もさうです。だけれど、眠いときには何もなくてよろ
しい」ミ云つた。

「ちや花子さんは眠いのですね」とエルマが聞いた。

花子は、

「エイ、少し」と云つた。それでエルマは腰元の光姫等を
連れて、柔かい氣持のよい寢床へ、花子を案内した。そし
て戸を閉めて外へ出て行つた。花子は暗い所で何も知らず
に夢路を歩いて居ます。